様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０９０４

研究課題名（和文）ルーマニア・エスノポップを創発する音楽文化資源の研究

研究課題名（英文）A study in inventive musico-cultural resources for Romanian ethnopop

研究代表者
諏訪　淳一郎（Suwa, Jun'ichiro）

弘前大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：４０３３６９０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：2000年代以降のルーマニアにおいて、エスノポップの担い手はロマであり、ワラキア地方では、彼ら職業音楽家はラウタリと呼ばれている。エスノポップの資源といえるムジカ・ラウタレアスカ（ML）は、彼らラウタリの親族関係を軸にバンドを形成しながら培われている。しかし、エスノポップの音楽文化資源としてMLを考える場合には、たんに音楽の形式的な相似や社会組織ではなく、むしろ音楽家の身体を構築する振る舞いに最も根源的な要因を見なくてはならないことが解明された。MLは観客との相互作用によって成り立っており、ラウタリたちはつねに審美眼を磨き、自分の顧客の心理を読み取ることによって、音楽を現出させているのである。

研究成果の概要（英文）：In Romania after 2000s, the Roma has been playing the principle role to the ethnopop; in Wallachia, these musicians are called lautari. The musical resource of the ethnopop, the muzica lautareasca (ML), is practiced by the band of lautari who are tied with kin relationship. However, musical struicture or social organization is not the main background for ML as musico-cultural resources; rather,it has been elucidated that the most fundamental element can be found in embodied behaviour, which constructs the musicians' bodies. ML is performed by intereactions with audience and for this the lautari make music through refining aesthetic judgement and reading phychological condition of the audience.

研究分野：文化人類学

キーワード：ロマ　ルーマニア　音楽　身体　エスノポップ　文化資源　文化人類学　音楽人類学

１．研究開始当初の背景

1)　研究代表者・諏訪淳一郎は、研究開始以前の 2 年間ルーマニア・ワラキア地方を訪問し、研究遂行のための予備調査を実施し、現地の音楽文化がエスノポップの創出によって変容しつつある状況について参与観察を行い、本研究課題の遂行に十分な準備を行った。また、フィールドワークの実施においては、音楽 CD 等を購入してサンプルの把握に努め、ルーマニア国立民族学博物館スペランツァ・ラドゥレスク教授から助言を受けるとともに、指導学生のイリナ・グリゴレが現地の連絡調整とルーマニア語の通訳ならびに翻訳を担当することで研究遂行のめどがついた。

２．研究の目的

エスノポップはグローバルな音楽表現すなわち「ポップなもの」をメディアとしつつも、土着的な音楽文化を資源として成立するため、エスノポップが生成する局面を参与観察することは、グローバリゼーションという現象を異文化間の相互作用として明らかにすることができる。

本研究は、この大きな目的のため、ルーマニアにおけるエスノポップ「マネレ」が創出する局面において作用する音楽文化資源について、音楽的な要素から明らかにすることに焦点を置いた。むろん音楽人類学の観点から見れば、音楽文化資源は必ずしも音楽形式や楽器などの実体に帰すことはできない。むしろ、実体的形式に習熟する学習過程そのもの、音楽活動を可能にする社会組織、所作や慣習、さらには聴衆とのコミュニケーションの様式など多岐にわたる現象として音楽文化資源が想定されなくてはならない。こうした広義のスタイル（メルロ＝ポンティが指摘するところの「スティル」）は、客体化された一つの固有の文化として想定することもできない。なぜならば、かりに「ロマの文化」なるものが特徴化されたからといって、それが実践される局面においては、その固有文化は必ず外部と接合しなければ可視化され得ないからである。

以上の予備的考察の結果として、本研究は素朴な少数民族文化研究の視座を排し、文化現象が生成する局面に接合するものとしてあらゆる音楽文化資源を取り扱うに至った。

３．研究の方法

バルカン半島のロマは家業によって高度に分業化された内婚集団によって社会生活を営んできた。現地では、この家業によるサブグループが最も重要な社会アイデンティティのカテゴリーとされてきた。ルーマニアにおけるエスノポップの担い手は、「ラウタリ」と呼ばれる音楽を専業とするロマの職業集団である。音楽を生業とするかどうかは多くの部分生来の特性に由来するものであるために、ラウタリにおいては内婚集団の境界と職業の選択が必ずしも一致しないことがよくある。また、ラウタリの多くは都市に居住しているため、音楽を生業としないものも何らかの形で知的職業に従事していることが多い。加えて、「フォルクローレ」と呼ばれるダンス向けの民俗音楽の演奏者も同様にラウタリと呼ばれ、ロマであっても別の内婚集団の出自を持つ者が参加している場合もあり、その実態は複雑である。

本研究は、ワラキア地方の中でもブカレストおよび南部のジュルジュ市周辺において活動するラウタリに焦点を絞りながら、参与観察と聞き書きからなるフィールドワークを実施した。具体的には①ジュルジュ市内に居住する 2 家族、③コマナ村の 2 名、④ムルシャ村の 1 家族、フラテシュチ村の 1 名、マール村の 1 名である。また、グラディシュテア村の結婚式でラウタリの行動についてフィールドワークを行った。さらに、エスノポップのマネレとラウタリによる民俗音楽「ムジカ・ラウタレアスカ」との関係については、何名かのラウタリがマネレのバックミュージシャンを掛け持ちしているので、彼らから活動内容の聞き書きを行った。

４．研究成果

フィールドワークの結果、以下のことが明らかとなった。

【エスノポップの現状】

ルーマニアの EU 加盟により域内への出稼ぎをするロマが増えた結果、相対的に音楽活動による収入が減り、ワラキアでは聴衆の世代交代に伴い徐々にマネレへと移行しつつある。30 歳以下の世代は 2000 年以降に生みだされたマネレを積極的に受容する層となりつつある。

マネレ自体にもサブカテゴリーが生まれつつある。2000 年ごろのスタイルは「古いマネレ」（マネレ・ヴェケ）と呼ばれ、よりエスニックな要素の濃いマネレとして認識されている。このマネレは中東のエスノポップから引用されたリズムや旋法を特徴とし、2010 年代のマネレにおけるヒップホップからの引用、より中東職の薄めたユーロ的な音楽イディオムの使用、プログラミングの多用といった流行から区別される。

さらに、マネレ・ヴェケにおいては歌手の個性がクローズアップされ、フロリン・サラム、ニコラエ・グッツァ、アドリアン・コピルといった重鎮の個性に伴いつつプロデュースされる傾向が強く、後発の新たなマネレはデュオやグループとしてマーケットに現れる場合が多くなっている。

ルーマニアの EU 加盟とユーロ危機という二つの大きな政治経済的背景にともなって、古いマネリストたちの活動内容も新しい段階を迎えている。たとえばサラムの場合、2012 年ごろからは長期の療養を経て国内の露出を減らし、海外で舞台に立つようになったが、これは国内での複雑な契約関係、暴力

行為、全体的な収入源が原因といわれている。グッツァはテレビの音楽番組でなく、自身のスキャンダルを売り物にしたトーク番組に出演し続けている。

上記から、エスノポップとしてのマネレはマネレ・ヴェケを中核に考えるべきこと、その音楽文化資源としてのムジカ・ラウタレアスカは、このマネレ・ヴェケと接合していると把握するべきであることが分かった。さらにいえば、ルーマニアにおけるポップの主流は、プロダクションのマーケティングが主導する新たなマネレと、アレクサンドラ・スタンやインナのように、主に米国で英語ポップの女性ヴォーカルとして活躍するケース、そしてよりコアな洋楽のファンに中心が移りつつあり、かつてのような新興経済勢力のサブカルチャーとしてのマネレ・ヴェケは当初の力を失いつつある。

このような文化的背景は、結果として音楽資源としてのムジカ・ラウタレアスカがよりエスニックな表象を帯びる素地にもなっている。これは、新たなスタイルがグローバルなカルチャーシーンを志向するなかで、その反作用として接合されつつ生み出されているのである。

【ムジカ・ラウタレアスカの現状】

エスノポップの音楽資源としてのムジカ・ラウタレアスカには、特別の形式的な特徴はラウタリの間で意識されていない。これは、先行研究が一部明らかにしてきたとおりであるが、形式として実体化された「ロマ音楽」が存在するのではなく、ロマが担い手として実践している音楽がすべてエスニシティを付与されて語られている。よって、ジャンルとしての「ロマ音楽」は言説の作用によって生成していることが再確認できた。

したがって、ムジカ・ラウタレアスカを音楽文化資源として考えるにあたっては、音楽の形式的側面として言説化されている身体に埋め込まれた文化的要素について明らかにしなければならないことが明白となった。

ムジカ・ラウタレアスカは、CD や MP3 のような形で普及しておらず、そのようなケースはアーカイヴ録音に限られている。BGM でも使用されない。これは、マネレなどのポップとは対照的である。ムジカ・ラウタレアスカは、対面的なライブの状況によってしか発生しない。民俗音楽のテレビ番組に出演するラウタリも、擬似的な対面状況を演出しているといえる。

ワラキア地方では、結婚式や文化行事における生演奏が行われている。とくに結婚式においては今も重要な役割を果たしている。結婚式では前キリスト教的な要素が重要な役割を占め、その執行においてはラウタリが介添え役を果たしている。たとえば、教会での挙式の後で披露宴が始まるまえに一連の儀礼行為が行われるが、これはロマも含めたラウタリ以外の住民は記憶しておらず、場数を踏んだラウタリだけが熟知している複雑なものである。テントを張った会場の入り口に小さなモミの木を置き、その先にはリンゴを突き刺しておくとか、花婿が花瓶を割ってその破片を家の屋根に向けて放り投げるといった儀式や、祝詞のようなものある。ラウタリがそのすべてを主導するようになったのは、一つにはすべての行為の合図が奏楽によること、もう一つには第三者であるラウタリが介添えという中間的な役割を果たすのに最適であるからと考えられる。とくに農村部では今も結婚式はこうした伝統的な形式によって行われている。

音楽によって区切られた儀礼の空間は、本質的にムジカ・ラウタレアスカによる音楽的な営為なのである。これが、ムジカ・ラウタレアスカをローカルな文化実践の資源として成立させる最も根源的な要因であり、ポップにおけるあらゆるムジカ・ラウタレアスカのイディオムの流用は、同時にこのローカルな文化的感触をポップの空間の中に持ち込む。たとえば、ムルシャ村の DJ ヴァシレは、モルドヴァのポップのグループ「ズドブ・シ・ズドゥブ」との共演によって名声を得たが、その PV の一部は彼の自宅で撮影された。これがモルドヴァとのコラボであることを考え合わせると、エスニックな土着的要素を表象する手段はルーマニアやロマを離れて汎バルカン的な土俗「ヴラハ」文化をもポップ化する回路ともなることを可能性も示している。

【エスノ文化資本と実践理論】

音楽文化資源としてのムジカ・ラウタレアスカは、ヨーロッパ全体における社会文化の再生産を視座に入れた場合、エスノ文化資本の現れであると言える。これは、研究代表者・諏訪淳一郎がロシア連邦トゥバ共和国における調査で現地の倍音唱法が文化資源となる場合に、グローバリゼーションとの相互作用のもとで発声した新たな文化資として指摘した。すなわち、ワールド・ミュージックという新しい音楽市場がソ連崩壊後にもたらされ、これまでソビエト文化の周縁にあったトゥバの倍音唱法が、そのローカルな特性によって市場に現れ、そこに農山村に起居するトゥバ人がそこにアクセスすることにより新たな文化資本を持つようになったのである。

ムジカ・ラウタレアスカもまた、社会主義崩壊以降のルーマニアにおいて、外部との接触がより頻繁になり、トゥバにおける芸能集団「フーン・フル・トゥ」のように、ワラキアでも「タラフ・デ・クレジャニ」が海外で広く活動し、またその過程において芸術表現を洗練化し、ムジカ・ラウタレアスカに新たな展開をもたらすに至った。前述のマネレ・ヴェケもまたこの路線をたどっていると見ることもできる。

ただし、結婚式のような在来の文脈で演奏され続けることが、エスノ文化資本としての価値と戦略を可能としている。グローバルな

活動をするアーティストの立ち位置を文化資本として裏付けているのは、今もなお少ない顧客を相手にローカルな場面で活動している多数のラウタリたちに他ならない。

エスノ文化資本の存在は、ブルデュが展開して実践理論にも大きな軌道修正を図る。ブルデュによれば、文化資本による社会の再生産は必ずより高位ないし主流の文化を表象するいわばプラスの身体性（ハビトゥス）の戦略によって実践されるものであった。他方、エスノ文化資本は、じつは社会的再生産が一つの文化動態のプロセスとしても存在することを示している。

このとき、ムジカ・ラウタレアスカはサブカルチャーではないことに留意しなくてはならない。一つの文化が固有で独立した実体として、急速な社会変容の中に主流としての一を獲得するのではない。ラウタリ立ちはロマではあるが、その主だった顧客はルーマニア人であるため、この音楽について彼ら自身の所有物としてみることはできない。なぜならば、前述の通り、ムジカ・ラウタレアスカとは対面状況の中で初めて減少として立ち現れる性格を有するからである。

つまり、エスノ文化資本の実践においては、労働階級やブルジョワのハビトゥスといったような、異なる社会階層同士が相互に無関係を装いながら孤立した文化的性向を表現するのではない。むしろ、対面的な状況下で、相互作用として、たとえばラウタリの身体なるものが生成していると見なくてはならない。ゆえに、ムジカ・ラウタレアスカに関しては、技芸の上達といった単純な身体技法に還元して論じることはできず、本質的に関身体的な次元として捉えなくてはならない。

【接合面でのずれ】

ロマとルーマニアのハビトゥスは、日常空間では「ずれ」として認識されている。ロマとルーマニア社会との相互作用の位相は大きく異なっている。ロマが親しげにルーマニア人と接し、相手を擬制親族の用語で呼ぶとき、警戒心を持たない素朴なルーマニア人の場合、それを友情の証として受け止めるが、現実には間をおかずに金品の要求が行われることがある。あるいは、ルーマニア人が純真な憐憫の感情からロマに金品を施すような時も、ロマは丁重にこれを受け取りながらさらに要求を行うことがある。ルーマニア人は、こうしたロマの行いに幻滅したり非難したりするが、ロマの側から見れば施しは厚情を持って受け取るという行いこそに、親愛の情が埋め込まれていると受け止める。

もちろん、例外的に市民社会の中に深く根を下ろしたラウタリであれば、ルーマニア人の文脈を身体化して人々と接することができる。しかし、音楽それ自体の中にこうした贈与の文脈が埋め込まれている以上、音楽をめぐるやり取りがラウタリとの間に生じる以上、こうしたずれが完全に消滅することはない。

【間身体的なレベルでの実践】

グローバルな状況下においてエスノ文化資本となるラウタリの間身体性について、2つの概念装置を立てて解明を試みた。「夢のアッサンブラージュ」(oneiric assemblage)と「ロマニチュード」(Romanitude)である。

夢のアッサンブラージュとは、ラウタリが有する審美性のありかである。ラウタリの音楽性において、美醜の別が最も重要なカテゴリーとなっているが、それは彼らの生きざまと同値のものとして受け止められている。すなわち、洗練され美しいものは正しく善なるものであり、反対に悪は醜く粗野なものとして認識される。そして、ルーマニア社会において自らがスティグマとして追っているロマの負のイメージを脱却するよう心を砕き、自身を自らが夢見た美の領域に同化させようとする。自身が奏でる音楽の響きに同一化することは、夢見たあるべき理想像としての美に同化することなのである。ラウタリの語りの中では磨かれた靴、アイロンのかかったシャツ、柔らかな物腰、幼少時に見た楽器の魅惑的な輝きや皆の注目を集めるラウタリの誇り高さなどとしてイメージ化される。

夢のアッサンブラージュにおいて、聴衆はラウタリの人格の延長として存在することになる。聴衆は夢のアッサンブラージュをラウタリに接合するエージェントすなわち媒介者となる。同時に、ラウタリは聴衆の持つ欲望のエージェントでもある。結婚式の披露宴でダンスに興じる人々の喜怒哀楽は、ラウタリをエージェントとしてルーマニア社会に存続させるのと同時に、ラウタリの生きざまを現実のものとする。このように、エスノ文化資本が生じる根底は、互いの身体が互いの延長となる間身体性に他ならない。さらに、これがアッサンブラージュ（集積体）と呼ばれるのは、ムジカ・ラウタレアスカという現象が、ラウタリと聴衆の間に生起する「夢」と現実と絡み合った状況の中で、それらすべてを包摂する形で生み出されているためである。ラウタリや聴衆の振る舞いをムジカ・ラウタレアスカに即して民族誌化することは、音楽の「文化的側面」について記述することではない。それらは音楽と不可分に結びついているばかりでなく、むしろラウタリの「音楽」そのものに他ならないのである。

ロマニチュードもまた、夢のアッサンブラージュと連関する概念装置である。これは、エスノ文化資本として欧州にラウタリが接合する段階で生起する。ラウタリの音楽つまり夢のアッサンブラージュが言説化される過程で、それはロマという文化的存在に一つの聴き方を提示することになる。本来、ムジカ・ラウタレアスカはロマとその外部とを寶背するアッサンブラージュであったが、ロマニチュードとして言説化されることによって、ロマのエンパワメントのための文化的な資源となる。

エスノ文化資本は直接的に金銭的な見返

りに結びついているかどうかは問題ではなく、それがディスポジションとして社会的ニッチを高め、ロマのアイデンティティにポジティブな役割を果たすかどうかが重要なポイントであるから、ロマニチュードはあるべきロマの姿を外部と接合することによって照射する作用を果たしていることになる。

【非言語コミュニケーションの位相】

エスノ文化資本が夢のアッサンブラージュやロマニチュードとして現れる局面は以下のような非言語コミュニケーションとして観察することができた。まず、多くのラウタリが音楽活動のエッセンスとして語る「フロリチーカ」（小さな花）がある。フロリチーカは、通常は即興的に演奏する装飾的な楽句を指し、先行研究においてもそのように扱われるが、実際は即興をもっと深い意味を有していて、それは聴衆の心情や気分を読み取って最も彼らの心を和ませ、慰め、元気づけるような選曲や歌唱を試みることへの言説である。つまり、フロリチーカは形式的なものでは決してなく、間身体的な音楽のありようそのものについて物語っている。

また、ラウタリには境界的な事例が存在している。これはロマニチュードがエスニシティに起因するのではなく、ムジカ・ラウタレアスカの実践から生じていることを示している。ラウタリとして路上で日銭を稼ぐ音楽家の中には、少数ではあるがロマではなくルーマニア人の出自を持つ者がいる。彼らは幼少時にロマの家庭で里子として養育され、あるいはロマの多く居住する近隣で生活を共にしている。よく見ると、肌のきめや目つきなどがロマらしくないと感じることが多いが、服装や立ち居振る舞いは完全にラウタリのマナーを身につけている。かれらはラウタリとして活動しているにもかかわらず、ロマではない。しかし、路上で彼らの演奏にチップを与える聴衆は、ラウタリ＝ロマという図式を持って彼らの音楽活動を認識している。

こうした局面において、ロマニチュードは音楽行為に携わる者やその周辺にいて音楽を聴く者にとって、ロマらしさという表象の中に音楽を認識する。このことからも、ロマニチュードは出自やエスニシティの実体とは関係なく、エスノ文化資本の萌芽としてルーマニア社会において作用しているということができる。

【音楽による多文化共生の可能性】

ロマニチュードと夢のアッサンブラージュは、エスノ文化資本を身体化させる力を応用すれば、ロマのエンパワメントに音楽を活用することができるという興味深い可能性を示している。ムジカ・ラウタレアスカにエスノ文化資本が生じる局面が現れていることは、それを使って文化アイデンティティを消滅しアノミー状態に苦しんでいるロマの子供たちに音楽教育を通じた精神的自立を促すことができる。また、子供たちに音楽を教えるラウタリも、生業集団という慣習的なサブグループや地域の枠を超えた紐帯によって子供たちや外部につながるという、新たな社会性を獲得する契機につながると考えられる。それがムジカ・ラウタレアスカなのかマネレ・ヴェケなのかは今後の検討課題として、研究代表者・諏訪淳一郎はモルドヴァ地方のラウタリに出自を持つロマのNPO活動家と連絡を取り、すでに開発人類学を取り入れた新たな研究課題の構想を立ち上げている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

① Jun'ichiro Suwa Embodiment of Ethnic Cultural Capital of Roma Lautari in Romania, SENRI Studies 査読有 2016

〔学会発表〕（計　９件）

①諏訪淳一郎　浪花節におけるフシ・スジ・カタリ　京都芸術大学招待講演　京都市内

②Junichiro Suwa Oneiric assemblages: The embodiment of political economy among roma lautari in Romania, ICTM Music and Minority Study Group Meeting 2014.7.23 国立民族学博物館

③ Junichiro Suwa Oneiric assemblage, becoming music and political economy of Romanian Roma lautari, AAA Annual Meeting 2013.11.24 シカゴ市内

④Junichiro Suwa Schismogenesis of ethnoc cultural capital in Romanian lautareasca music, ICTM Conference 2013.7.16 上海音楽学院

⑤ Junichiro Suwa Maintenamce of in-between in aquapelagic assemblage, SICRI Conference 2013.7.11 インドネシア・ツアル島

⑥諏訪淳一郎　ふし、物語、ヤンキー的なもの：浪花節を逆照射する試み　東京工業大学シンポジウム 2013.5.19　東京工業大学

⑦ Junichiro Suwa Orikuchi Shinobu's *hassei* as a possibility for an anthropology of geino Anthropology of Japan in Japan Spring Workshop 2013.4.20 宮崎国際大学

⑧諏訪淳一郎　ローカルコモンズとしてのメラネシアン・ポップ　日本文化人類学会研究大会 2012.5.24 広島大学

⑨グリゴレ・イリナ・フロレンティナ　「獅子になる」ということ：津軽地域における獅子舞の文化人類学的研究　日本文化人類学会東北地区例会　2013.3.8　東北大学

〔図書〕（計　　１件）

諏訪淳一郎　パフォーマンスの音楽人類学 勁草書房 2012　総ページ数 235

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
諏訪淳一郎　（SUWA Junichiro）
弘前大学・国際教育センター・准教授

研究者番号：40336904

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
グリゴレ・イリナ・フロレンティナ
(GRIGORE Irina Florentina)